

■特別支援学級在籍の子どもたちへの実践事例

マルチメディアDAISY図書との出会いの日

長野県高森町立高森北小学校・高森町子ども読書支援センター
司書 宮澤 優子

はじめに

長野県高森町には、高森南小学校と高森北小学校があり、その2校の卒業生が高森中学校へと進学します。高森町は2020年に高森町子ども読書支援センターを稼働させ、公共図書館と学校図書館が協働して町の図書館的資源をフル活用しながら子どもたちの読書を包括的・継続的に支援していますが、さまざまな取り組みの中で、読書のためのバリアフリーに関して情報も共有しながらさまざまな支援をしています。「わいわい文庫」については、2020年度の申し込み以来、毎年提供いただき、特別支援学級在籍の児童・生徒を中心に活用してきました。

本稿では、マルチメディアDAISY図書導入時のサポートを中心に、高森北小学校の事例をお伝えします。

さまざまな「手段」をきちんと知らせておくことの重要性

高森町では、情報活用能力の年間指導計画と、それに掲載された指導項目一つにつき1本の指導用教材を3校で

共有し、1年生から情報活用のスキルを積み上げています。その中で、もしも「本が読めない」「本が読みにくい」といったことが生じた場合にどうするか？という手段について、入学後できるだけ早めに指導することにしていきます。

いまはまだわかっていない特性、突発的な健康問題などで読めない・読みにくいというシーンに誰もが遭遇する可能性があるという前提のもと、もしもそういう状況になったとしてもさまざまな方法で読むことができる手段を知らせておくのです。

すでに何らかの手立てが必要な子どもたちへの案内はすれども、いまそれを必要としていない子どもたちがその存在を知らないということは、手だてを必要とする状況やその子どもへの無理解にもつながりますし、もし本人に手だてが必要になった時に、解決のための情報を外発的にしか知りえることができず、誰かに案内されなければ知らないまま過ごすことになりかねません。

また、これまでの勤務校で読書補助具の紹介や学校図書館のカウンターへの常設、個人での注文の機会の設定によりディスレクシアがわかった事例があり、ニーズがあるところだけでなく、潜在的なニーズの掘り起こしの必要性を強く感じていることから、さまざまな「物」や「サービス」の紹介の重要性を感じています。

マルチメディアDAISY図書との初めての出会い

さて、特別支援学級に在籍する子どもには、毎年きちんと「マルチメディアDAISY図書と出会う」機会を設定しています。こういうものがあるよ、こういうものが使えるよ！と伝えただけではなかなか使いこなせるようにはなりません。担任にとっても初めての出会いである場合もあります。きちんと時間をとって子どもたち自身でできるようになるまで経験を積み、日常の読書のツールにまで引き上げます。

マルチメディアDAISY図書で読むために、子どもたちはさまざまな過程を踏みます。またどの過程にもつまずきの可能性があり、それらを一つ一つ解決していくためにも大切な時間です。「わいわい文庫」はさまざまな工夫がされており、それを自分たちで見つけながら困りごとを解消し、使えるようになるまで寄り添います。

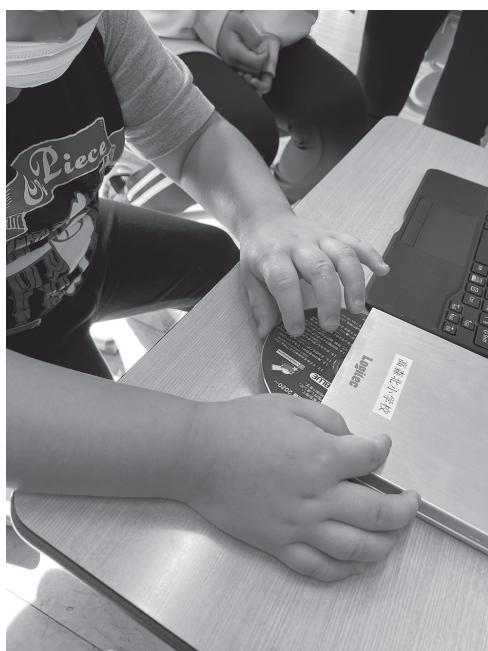
たとえば、実際に「読む」までにもさまざまな工程があります。読みたい本をリストやポスターから選び、その本がどのディスクに入っているのか見極め、何枚もあるディスクの中から必要なものを選んで、ディスクをケースから取り出し、それを機器にセットすること。デバイスを起動させること、マルチメディアDAISY図書を起動させること、読みたいコンテンツを選ぶことなどの操作の方法も知らなければなりません。



いよいよ読める段階になっても、読み上げ速度の調整をはじめ、自分が一番快適に読めるさまざまな設定の方法と、自分の嗜好をきちんと把握するという作業が必要です。そして読んだ後も、終了の仕方、デバイスのシャット

ダウン、ディスクを機器から出してケースにしまう、使ったさまざまなツールをもとのように片づける、といった工程があります。もし一人で読むのなら、これらがすべて自分でできたほうが利便性は上がります。自分ではできないこと、例えばディスクをうまくケースに入れられないということがわかれば、ケースではないものになってしまう方法を考えるなり、誰かに「しまっしてほしい」とお願いできるようにしていく必要があるわけです。

このように丁寧に「読む」準備や片づけも含めた「読書活動」をサポートし、担任と一緒にその子に合わせたサポートの方法や運用の方法を考え、ようやく彼らのマルチメディアDAISY図書での読書がスタートします。



子どもたちのさまざまな気づきと支援のバランス

さて、「わいわい文庫」のマルチメディアDAISY図書と出会った子どもたちは、さまざまなことに気づきながら、日常で使えるツールとして日常に落とし込んでいきます。

例えば読みたいものが決まって、いざどのディスクに入っているか？を探すシーンでは、同じディスクに入っているコンテンツがポスターでは同じ色の背景で囲われていることに気がついたり、同じ年度のディスクには体の色と持っている本の色が同じクマのイラストが付いていることや、そのイラストはポスターと連動していることなどを発見します。

ケースへディスクを戻すときに、ラベルを上にして持ったまま戻すと、ケースの表からはディスクのラベルが見えないことに気がつき、探す時に大変だ！と言ってひっくり返します。ケースにうまく戻せないで苦労している低学年に、高学年が戻し方のコツを伝授しているシーンも見られます。

「使いにくさ」をすべて取り除いてあげたほうがいい子どもと、自分で少しずついろいろなことに気づきながら覚え、体得していったほうがいい子どもがいます。

前者は、例えば少しのつまづきが読書意欲喪失と直結している子どもです。

あとは読むだけ！の状態に担任がセッティングして待っていれば読めるなら、それはそれでもいいでしょう。一方、困難はあれど何でも自分でやりたい！もしくは人に手を出されるのが嫌！という子どももいます。

担任との関係性によって、前年度と違う態度をとる場合もあります。ですから毎年毎年、その年にいただいた新しいコンテンツと一緒に見るのに合わせ、どういった運用がそれぞれの子どもにとってよりよい環境となるか？一人ひとりに合わせた読書機会のあり方を担任と探る時間として大切にしています。

「読めた！」子どもたちから 教えられたこと

読み上げ機能をもものすごく速いスピードにする子どもや、思いもよらない配色を好む子どもがいます。例えば、ともすれば大人でも聞き取れないほどのスピードで読み上げ機能を使う子どもがいました。彼は知的障害児学級に在籍しており、指導はゆっくりはっきりした言葉で話すことを心がけると校内で共有されていたにもかかわらずです。読めているのか？ 理解できているのか？ と考え、彼にスピードについて進言しようか？ と担任と話し始めた時のことでした。紙の本を読むよりよほど集中しており、不思議に思っ

て終わるのを待ちました。聞くと内容も彼なりに把握しているではありませんか。「速いほうが楽しい。」「速いほうがわかる！」

そしてその後、彼なりの言葉で「先生たちは、いっぺんに言ってくれればいいのに、ゆっくり言うから、最初のほうを忘れちゃうんだ！」ということを伝えてくれました。この件を機に、彼の特性に対するサポートの見直しが必要だという認識を職員が持ち、同時にこうあるべきとかこれがいいだろう、という思い込みの存在に気づき、それに対する危機感も感じました。

そう考えると「どの色も気に入らん！」という子どもがいれば、それは本当に他の色のほうが良くて、現状の選択肢やそれらの組み合わせの中にはその子にとっての最適解がないという可能性も考えられます。マルチメディアDAISY図書を「多機能」ととらえていながらも、万能ではないのだと意識するきっかけでもありました。

わいわい文庫によるコンテンツ 提供の「継続」と「継承」が ≡学校内での支援の継続と継承

一度申し込むと、毎年新しいコンテンツが自動的に送られてくるこの「わいわい文庫」のシステムは、多忙な学校の現場において、マルチメディアDAISY図書というコンテンツの提供を

継続するために、非常に有効であると思っています。継続が提供可能コンテンツを確実に増やすので、子どもたちの選択肢も増やせるというありがたさを感じています。

また、職員の異動が日常的な学校現場において、担当職員が変わっても物理的な供給が途絶えないことで支援の「継承」の可能性が非常に高くなるという利点があります。初心者でも扱いやすい案内がきちんとされており、たとえ初めて扱う職員であってもそう苦労することなく導入できるでしょう。

読書の一番最初のハードルは「読むものを手元に準備すること」だと考えています。どんなに読書が好きでも読むものが手元になければ読めないのですから当然ですが、「読むもの」＝「読めるもの」と考えたとき、私たちはさまざまな様態で「読むもの」を準備する必要があります。そしてそれらすべての手段を子どもたちに知らせ、見せておく必要があると考えています。

「誰もが読める環境」を探りながら、子どもたちからの「これ読んだよ！」の報告に喜びを覚える日々です。

